九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

逆接関係を表す表現に関する日中対照研究 : 文法化の観点からの分析を中心に

王, 琪

https://doi.org/10.15017/2534516

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

要　旨

逆接を表す接続表現は、逆接ではない関係を示す時、つまり談話標識として使われることがある。本研究では、そういった多機能化現象を「文法化」として捉える。同じ立場をとった先行研究は日本語にも中国語にもみられるが、それらの表現の具体的な文法化プロセス、および表現間の相違点についての分析は管見の限り見当たらない。また、言語間の比較研究もまだなされていない。そこで、本研究では通時的および共時的という 2 つの観点から日本語の接続詞・接続助詞「けど」、接続詞「でも」と「ただ」、また中国語の逆接接続詞“但是”、“可是”と“不过”の文法化現象に注目し分析する。加えて、実際の会話で逆接関係を示す際に逆接接続表現以外の表現が用いられることもしばしばみられることに注目し、日本語の「というか」と中国語の“其实”も取り上げて、文法化の理論で説明を行った。

序論では、研究背景、研究の目的と対象および各用語の定義について述べた。第 2 章では、日本語と中国語の逆接表現に関する先行研究を概観した。意味論と文章論の観点から分析した研究と談話分析または会話分析のアプローチをとった研究に分けて整理した。その上で、先行研究の問題点をまとめ、本研究の位置付けを示した。第 3 章は、本研究の枠組みとして用いた文法化という理論の紹介を行った。次いで第 4 章では、本研究で用いたデータ、その収集法と研究方法について説明した。

第 5 章から第 7 章にかけてが本論である。共時的な観点から分析をする前に、古い時代へと遡って各々の語源を明らかにしておく必要があると考え、第 5 章では通時的な観点から日中逆接表現がこれまで経てきたプロセスを詳細に記述した。現代の日本語と中国語に使われている逆接接続表現が、どのような変化を経て 1 つの接続表現として成り立っていったのかを、先行研究の分析を踏まえたうえで、文法化の理論に基づいて説明を行った。

第 6 章では、Traugott（1982）が提唱した文法化モデルに照らし合わせながら、現代の日本語と中国語における各逆接表現の各段階での具体的な機能についてまとめた。Traugott（1982）は文法化のプロセスを Propositional Component > Textual Component > Expressive Component という 3 つの段階に分けている。しかし、実際の会話例を分析したところ、この経路では説明しきれない会話例が観察されたため、従来のプロセスに修正を加えた経路を提案した。本研究で提案したプロセスは Content Textual Component > Interactive Textual Component > Procedual Textual Component である。分析にあたり、まず、発話者自身の前後の発話内容の逆接関係を示す“Content Textual Component”として使わ

れる各逆接表現が用いられた会話例を示し説明を行った。次に、話し相手に対して、逆接または対立する発話者の主観的な信念と態度を表明する場合は “Interactive Textual Component”に分類し、該当する会話例を取り上げ分析した。逆接接続表現は不同意表明などの行為によく使われるが、対人関係構築においてはマイナスな影響だけでなく、相手を褒めたり慰めたりする時にも使われる。さらに、“Procedural Textual Component”の段階に入る逆接表現の会話例について分析した。この段階では、逆接表現のもともとの逆接の意味が薄くなり、発話者は話し相手の面子を配慮して自分の主張を和らげたり、これまでと異なる話題を切り出す時、逆接接続表現を使ってその唐突感を軽減させたりする。本章の最後には、各表現の出現数および談話標識としての使用数の割合を数値で示した。結果として、日本語の「けど」と「でも」と中国語の “但是”と“不过”は出現数が高く、逆接を示す機能から談話標識の機能まで文法化が進んでいることが分かった。一方、「ただ」と“可是”は、出現頻度が低いだけではなく、談話標識的な使い方も観察できなかった。

第 7 章では、現代の日本語と中国語で逆接表現として捉えられてはいないが会話では逆接関係を示す機能を持つ表現として、日本語の「というか」および中国語の副詞“其实”を取り上げて議論した。「というか」と“其实”は本来は逆接接続表現ではないが、会話では逆接関係を表すために使われることも多く、さらに話題を展開させる談話標識にまで発達しているということを示した。

第 8 章では、総合的な考察を行った。具体的には、「機能の多寡」、「統語的位置の自由度」、「出現頻度」と文法化の度合いとの関係から、日本語と中国語の各逆接接続表現の文法化について、表現間および両言語間の類似点と相違点をまとめた。また、各表現の文法化に伴う（間）主観化現象について指摘した。そして、「というか」と“其实”が、本来的な逆接の接続表現と同じプロセスで文法化した理由および両者が逆接的機能に至るまでのメカニズムについて考察した。

第 9 章は結論であり、本研究をまとめるとともに今後の展望についても述べた。

本研究は、日本語と中国語の逆接接続表現の文法化現象について、通時的および共時的に考察を行った。共時的な分析をもとに、日本語と中国語の各逆接表現が談話標識にまで文法化したプロセスを提示した。また、表現間と日中言語間の共通点および相違点を新たに示した。さらに、「というか」と“其实”の文法化と日中逆接表現の文法化との関連性を明らかにした。